

講義の「話段」の多重構造を捉える 手がかりとしてのメタ言語表現の分析

李 婷

要 旨

本研究は、学部留学生の講義理解の支援のために、講義の談話構造を理解する手がかりの解明を目指すものである。メタ言語表現が「話段」の多重構造を捉える手がかりになるという仮説を設定し、2種の講義資料を分析した。まず、「非話段区分箇所」よりも、「話段区分箇所」の方がメタ言語表現の出現率が圧倒的に多く、「話段区分箇所」の約7割にメタ言語表現が使用されていることから、仮説の妥当性を検証した。次に、「話段」認定の手がかりとなるメタ言語表現の特徴(①~③)を明らかにした。①先行「話段」の終わりよりも、後続「話段」の始めに多用される、②「構造言及」、「項目列举」、「自他発話焦点化」の3種が「話段」認定の際により有力な手がかりになる、③高次元の「話段」を認定する役割が大きい。また、「話段」認定の複合的な手がかりとして、「話段区分箇所」におけるスライドの切り替えや、メタ言語表現と共起する接続表現、フィラーにも触れた。

キーワード

講義の談話構造 「話段」の多重構造の認定 話段区分箇所 メタ言語表現

1. はじめに

大学の講義の受講者は、内容と構造の両面において、高度な談話理解能力が求められる。内容面で、すべての情報が把握できなくても、話題の大小や軽重に気を配りながら、必要十分な情報を捉える必要がある。構造面でも、断片的な細部の理解ではなく、講義全体の展開や話題の相互関係を捉える必要がある。講義の談話構造を正確に把握することで、話題の推移のみならず、話題の相互関係も捉えられる。講義の談話理解において、構造面の理解に重要な意義があると考えられる。佐久間編著(2010:45)では、講義の談話を構成する大小の「話段」を捉えることで、講義の談話の多重構造を把握できるとされている。

『話段』(佐久間 1987、2006)とは、談話を直接に構成する要素であり、文章の成分としての『文段』(時枝 1960、市川 1978)に対する音声言語の談話の成分である。」

(佐久間編著 2010:45)

佐久間編著 (2010:47) は、「話段」とは「内容の『階層性』というよりも、むしろ、意味の『重層性』、さらに、情報伝達の『多重性』を本質とする話題の統括機能に基づく単位であり、談話の全体的構造を構成する直接的成分でもある」という。

「話段」は、講義の談話展開の多重構造を捉える単位であり、講義の表現と理解において、重要で有効な単位であるといえよう。だが、受講者、とりわけ、日本語を母語としない学部留学生にとって、「話段」の把握は容易なことではない。そこで、「話段」を認定する手がかりの提示が、受講者の講義理解の支援につながるのではないかと考えられる。

「話段」の認定には、「話段」と「話段」の間にある「話段区分箇所」に着目する必要がある。「話段区分箇所」に何らかのマーカースが多用されていれば、それが「話段」認定の手がかりになるはずである。本研究では、「今度は、話し言葉における言い換えというのを考えてみたいと思います。」や「一つ目はですね、」「以上、話してきたことをまとめますと、」のような講義者の用いるメタ言語表現が「話段」を認定する手がかりになるのではないかとという仮説に基づき、検証する。

2. 先行研究と本研究の位置づけ

2.1 メタ言語表現に関する先行研究

西條 (1999:14) は、メタ言語表現とは「談話において、自分あるいは他者の言ったこと、これから言うことに言及する表現」と定義している。日本語のメタ言語表現に関する主な研究は、杉戸・塚田 (1991・1993)、杉戸 (1996・2006 など)、古別府 (1993・1994)、西條 (1996・1999) などがある。杉戸・塚田 (1991・1993) は、メタ言語表現を使用動機によって分類し、専門的文章と公的なあいさつにおけるメタ言語表現の類型と出現位置を分類している。杉戸 (1996・2006 など) は、一連の研究において、待遇意識、伝達過程と内容の調整、規範意識、言語行動の対人性などの観点からメタ言語表現を分析している。古別府 (1993・1994) は、研究報告場面におけるメタ言語表現の機能を分類し、日本人と留学生の使用状況の比較、留学生の使用上の問題点を指摘し、教材化を目指したメタ言語表現の構成要素リストの作成を試みている。西條 (1996・1999) は、討論場面におけるメタ言語表現の機能を分類し、学習者の聴解におけるメタ言語表現の有用性、接触場面における学習者方略、メタ言語的方略の訓練効果、学習者の作文推敲における教師のフィードバックとメタ言語表現の役割について分析している。

2.2 講義の談話に関する先行研究

西條研究代表者 (2007)、佐久間編著 (2010)、佐久間研究代表者 (2014・2015) による日本語の講義理解の共同研究では、「Ⅰ. 講義の談話の展開的構造を分析するための方法論」、「Ⅱ. 講義の談話の表現特性」、「Ⅲ. 受講者の講義理解の諸相の解明」という観点から分析されている。第Ⅰ部 (佐久間編著 2010:1-72) では、講義の談話の展開的構造を分析する方法論として、「情報伝達単位 (CU)」¹ (佐久間 2007:133-136)、「話段」と「談話

型) (佐久間 1987・1999) という概念を導入している。第Ⅱ部 (佐久間編著 2010:73-204) では、「提題表現」「叙述表現」「反復表現」「指示表現」「接続表現」「メタ言語表現」「引用表現」「参照表現」「非言語行動」という 9 種の表現特性について多面的に分析されている。第Ⅲ部 (佐久間編著 2010:205-256) では、受講ノート、受講後の要約文と口頭要約を資料に、日本語母語話者と外国人留学生の学部生による講義理解の実態が解明されている。

2.3 講義の談話のメタ言語表現に関する先行研究

講義の談話のメタ言語表現を扱った研究として、西條 (2000・2001)、澤邊 (2001)、関口 (2005・2006)、中井・寅丸 (2007・2010) などがある。西條 (2000・2001) は、講義の構造が分かるノートを取るために、メタ言語表現を手がかりとする談話構造図の作成法を提案し、教育実践により、効果を検証している。澤邊 (2001) は、日本語学習者と母語話者の講義聴解におけるメタ言語表現の影響に関する実験を行ったが、材料は 6 分間の講義で、実際の講義理解とは異なる。関口 (2005・2006) は、教育実践を通して、メタ言語表現によって情報を獲得する方法を述べている。しかし、講義の構造を把握するには、メタ言語表現が役立つという前提で論が進められており、メタ言語表現がどのように講義の構造に関わるのかについては、言及されていない。中井・寅丸 (2007・2010) は、実際の大学の講義 (A と B) を扱った佐久間編著 (2010) の共同研究である。講義の談話に使用されたメタ言語表現の機能を分類して、出現傾向を分析し、講義の「Ⅰ. 開始部」「Ⅱ. 展開部」「Ⅲ. 終了部」、「話段」の「はじめ」「なか」「おわり」、「話段」の「中心文」におけるメタ言語表現の機能と表現形式の特徴を指摘している。「話段」内部の談話展開とメタ言語表現の出現傾向を明らかにしているが、「話段区分箇所」に着目したものではない。

本研究は、先行研究を踏まえて、実際の大学の講義を資料として、メタ言語表現が「話段」認定の手がかりになるか否か、また、なるとしたら、メタ言語表現がどのような文脈で用いられ、どのような特徴があるかについて検討する。

3. 研究方法

メタ言語表現が「話段」を認定する手がかりになるという仮説を検証するために、「話段区分箇所」と「非話段区分箇所」におけるメタ言語表現の出現率、「話段区分箇所」におけるメタ言語表現の出現傾向と特徴を明らかにする。分析資料は、表 1 に示す、佐久間研究代表者 (2014・2015) における 2 種の講義 A と G² を研究代表者の許可を得て用いる。

表 1 佐久間研究代表者 (2014・2015) における 2 種の講義資料

講義	分野	講義者		教材教具	所要時間	総文数
A	文章表現論	30代	男性	プリント・板書	61分	418文
G	社会言語学	40代	男性	パワーポイントのスライド	96分	616文

まず、2 種の講義 A と G におけるメタ言語表現の認定作業を行う。メタ言語表現の定義は、中井・寅丸 (2010:153) の「講義の談話において、講義者が自分自身や受講者の言語

行動に明示的に言及することによって講義の談話の構造をわかりやすく示し、重要な点を明らかにして、受講者の講義理解を促進させる言語表現」に従う。メタ言語表現の機能分類も、表2に示す中井・寅丸(2010:157-158)の7分類を用いる。

表2 中井・寅丸(2010:157-158)による「メタ言語表現の機能分類」

種類	用例
①話段の構造に対する言及	
①-1 前触れ型	A-199 (8) で、ええと、さて、今度は、話し言葉における言い換え <u>というのを考えてみたい</u> と思います。
①-2 後付け型	A-394 <u>それが、まあ、あの、今日の話の、メイン・テーマ</u> でした。
②項目列挙	A-202 で、あの一、言い換えにも二通りあると思うんですね。(A203 <u>一つは、</u> ～。A204 <u>もう一つは、</u> ～)
③発話自体の機能明示	
③-1 理由	A-345 <u>それはなんでだろうか</u> というのと、やはり、～。
③-2 要点	A-048 ですから、まず、 <u>ここで押さえてほしいのは、「言い換え」というのは、理解する人のためにしているんだ、</u> ということです。
③-3 まとめ	A-057 ま、そういうふうに、典型的には、～、ま、 <u>これくらいにまとめられる</u> と思うんですけども↑、～。
④述べ方に対する言及	A-197 まあ、非常に大雑把に言ってしまうえば、「すなわち」よりも「つまり」の方が、2倍、「要するに」は3倍、解釈の入る度合いが高いと。
⑤自他発話焦点化	A-395 そして、まあ、「ていうか」が、なぜ、ふ、不愉快に感じられるかというの <u>は一、先程言ったとおり</u> 、その「ていうか」というのが～。 A-042 この、えっと一、UさんとFさんの言葉が端的にしているように、その、やはり、読者、理解者目当て、理解者に分かってほしい。
⑥講義参加者の知識・理解に対する言及	
	A-096 こういう感じで見えてもらえれば、 <u>わかります</u> 。
⑦言葉の定義	
⑦-1 用語の言換え説明	A-118 繫辞 <u>というの</u> は、その、「A is B」の「is」に当たるものですが、
⑦-2 用語についてのことわり	A-376 あの、「じゃなくて」に比べて、とても、あの一、穏やかな表現、 <u>ある意味奥ゆかしいとも言ってもいいぐらいの表現</u> なんです、それが不愉快に思われる原因は、一つ目。
⑦-3 表現の検索	A-358 また、そういう、いくつかの表現を一つ挙げただけにすぎないという感じが、「ていうか」にはありますので、それによって、あの一、 <u>何でしょう</u> 。(A-359 軽さ、みたいなものですね↑)

中井・寅丸(2010:155)では、7分類の初めの方が「講義の進行により強く言及する機能」で、終わりの方が「講義の内容により強く言及する機能」を示すと主張されている。「講義の進行により強く言及する機能」とは、「受講者にとって、講義内容がどのような構造や順序、方法で伝達されるかを捉えることにより、講義を理解する上での手がかり」とされ、「講義の内容により強く言及する機能」とは、「受講者が講義のキーワードとなる用語についての知識と理解を確認し、既習の内容と今話題になっている内容との関連性をつかむことができるため、講義を理解する上での手がかり」と規定されている。

次に、佐久間編著(2010:49)と佐久間研究代表者(2014:13-14)における講義AとG

の「談話構造図」(【添付資料】³の図1、図2参照)に示された全5次元の「話段」を研究対象とする。佐久間(2010:46, 2014:14)に従い、第1、2次元を「大話段」、第3、4次元を「話段」、第5次元以下を「小話段」とする。第1次元の「大話段」は「Ⅰ. 開始部」、「Ⅱ. 展開部」、「Ⅲ. 終了部」、第2次元の「大話段」は1、2、3など、第3次元の「話段」は1.1、1.2、1.3など、第4次元の「話段」は1.1.1、1.1.2、1.1.3など、第5次元の「小話段」は1.1.1.1、1.1.1.2、1.1.1.3などである。さらに、第6次元以下の十数次元まで細分されるが、実際の講義理解において、「小話段」を十数次元まで意識して、記憶することは不可能である。受講者にとって、講義理解の大筋を捉えるには、第5次元までの「話段」の把握が必要だと考えられる。本研究は、第5次元までの「話段区分箇所」を研究対象とし、さらに下位の次元の「小話段」については、考察対象外とする。

また、「話段」と「話段」の間を「話段区分箇所」として、全5次元の「話段区分箇所」を抽出する。「話談区分箇所」とは、先行する「話段」の最後の1文と後続「話段」の最初の1文と見なす。文脈によっては、前後の2文から3文に及ぶものもある⁴。抽出された「話段区分箇所」の文数、及びそれ以外の「非話段区分箇所」の文数を集計して、それぞれの文数に対するメタ言語表現の出現率を算出し、比較する。

メタ言語表現の出現傾向については、「話段区分箇所」を「前方」(先行する「話段」の最後の文)と「後方」(後続「話段」の最初の文)に分けた後、メタ言語表現の有無により、次の4種類に分ける。前方・後方ともメタ言語表現がある場合は「a.両方あり」、「前方」しかない場合は「b.前方あり」、「後方」しかない場合は「c.後方あり」、どちらにもない場合は「d.両方なし」と規定する。「a.両方あり」、「b.前方あり」、「c.後方あり」の合計は「1.メタあり」、「d.両方なし」は「2.メタなし」と称することにする。

4. 分析結果

以上の研究方法によって、講義Aから38箇所(76文)、講義Gから151箇所(272文)、全189箇所の「話段区分箇所」が抽出された。表3に、「話段区分箇所」と「非話段区分箇所」の文数に対するメタ言語表現の出現率を示す。

表3 「話段区分箇所」と「非話段区分箇所」の文数に対するメタ言語表現の出現率

資料 話 段	講義 A		講義 G	
	文数	メタ言語表現の数と 文数に対する出現率	文数	メタ言語表現の数と 文数に対する出現率
区分箇所	76	44 (57.89%)	272	165 (60.66%)
非区分箇所	342	67 (19.59%)	344	60 (17.44%)
計	418	111 (26.56%)	616	225 (36.53%)

講義Aには、「話段区分箇所」は76文で、「非話段区分箇所」は342文であり、それぞれ、44例と67例のメタ言語表現が観察されている。文数に対するメタ言語表現の出現率は、「話段区分箇所」が57.89%(76文に対する44例のメタ言語表現)であり、「非区分

箇所」の19.59% (342文に対する67例のメタ言語表現) よりも高い。講義Gも「非話段区分箇所」の17.44% (344文に対する60例のメタ言語表現) よりも、「話段区分箇所」におけるメタ言語表現の出現率60.66% (272文に対する165例のメタ言語表現) の方が高い。以上のことから、講義A、Gともに、メタ言語表現は「話段区分箇所」に多用されているといえよう。

4.1 第1次元の「大話段区分箇所」におけるメタ言語表現

第1次元の「大話段」は、「Ⅰ. 開始部」、「Ⅱ. 展開部」、「Ⅲ. 終了部」の3種である。講義の全体的構造を捉えるために、「大話段」ⅠとⅡの間、ⅡとⅢの間の「話段区分箇所」に、Ⅰの始めとⅢの終わりも含めることにする。

表4 第1次元の「大話段区分箇所」におけるメタ言語表現

講義	a.両方あり			b.前方あり			c.後方あり			1.メタあり(a+b+c)			2.メタなし	
A	0(0.00%)			1(25.00%)			2(50.00%)			3(75.00%)			1(25.00%)	
G	1(25.00%)			1(25.00%)			1(25.00%)			3(75.00%)			1(25.00%)	
種類	①-1	①-2	②	③-1	③-2	③-3	④	⑤	⑥	⑦-1	⑦-2	⑦-3	計	
A	1	1	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	4	
G	1	2	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	5	

第1次元の「大話段」は、表4に示すように、講義A、Gとも「1.メタあり」が75%で、「2.メタなし」が25%となっている。メタ言語表現の種類別出現数から見ると、「①構造言及」が最も多い。以下、具体例を示しながら、分析する。各用例の「話段区分箇所」は、【前方】と【後方】に分けて表示し、「話段」の番号、「話段」の始めと終わりの文番号、「話段」のタイトルも示した。メタ言語表現は【1】【2】などの番号と下線で示す。

(1) 講義Aの第1次元の「大話段」ⅡとⅢの「大話段区分箇所」(c.後方あり)

【前方】Ⅱ。(033~382) 講義内容の説明

A-382 ま、このあたりに、その、「っていうか」の不愉快さの原因があって、あの、アンケートなんか採ると、皆さんに嫌われてしまう、ということになるんじゃないかと思えます。

【後方】Ⅲ。(383~418) 講義の終了と調査の指示

A-383 で、えっとー、【1】③-3以上、話してきたことをまとめますとー、まあ、あのー【2】⑤最初に言いましたように、リダンダンシアの話、話をしましたように、その、言い換えるっていうことは、人間の表現行為そのものである。

例(1)は、講義Aの「Ⅱ.展開部」と「Ⅲ.終了部」の「話段区分箇所」である。前方のA-382には、メタ言語表現がないが、後方のA-383には2例使用されている。まず、接続表現の「で」、フィラーの「えっとー」に続き、メタ言語表現【1】で「まとめ」という機能を示している。次に、フィラーの「まあ」と「あのー」を挟んで、「⑤自他発話焦点化」のメタ言語表現【2】によって、講義の最初(「Ⅰ.開始部」の「話段」3.1)に触れた「リ

ダンダンシアの話」を受講生に思い出させた上でまとめ、「Ⅲ.終了部」を開始している。

(2) 講義 G の第 1 次元の「大話段」ⅠとⅡの「話段区分箇所」(a.両方あり)

【前方】Ⅰ.(001~230) 講義の開始と課題の提示

G-230 それから、あの、下ですね、【3】②4 番に関して言うと、言葉は変化するというところと関わりがあるもので、まさに、えっと、こうした観点で見ると、まあ、人称表現というのは社会言語学的に見て面白いということになります。(3) {スライド切り替え}

【後方】Ⅱ.(231~603) 講義内容の説明

G-231 はい。

G-232 では、えっと、【4】①-1 見たいんですけども、見て行きたいんですけども、えっと、ここではですね、ま、1 人称を挙げてあります。

例(2)は講義 G の「Ⅰ.開始部」と「Ⅱ.展開部」の「話段区分箇所」である。前方には、「②項目列挙」のメタ言語表現【3】で 4 番に言及してから、「Ⅰ.開始部」を終了している。後方では、感動詞の「はい」、接続表現の「では」、フィラーの「えっと」に続いて、【4】の「①-1 前触れ型構造言及」のメタ言語表現を使用している。また、講義 G は、スライドが使用されており、例(2)の「話段区分箇所」ではスライドの切り替えも伴っている。

4.2 第 2 次元の「大話段区分箇所」におけるメタ言語表現

第 2 次元の「大話段区分箇所」は、両講義からそれぞれ、5 カ所と 7 カ所抽出され、メタ言語表現の出現数がそれぞれ 9 例と 14 例である。

表 5 第 2 次元の「大話段区分箇所」におけるメタ言語表現

講義	a.両方あり			b.前方あり				c.後方あり				1.メタあり (a+b+c)	2.メタなし
A	2(40.00%)			1(20.00%)				1(20.00%)				4(80.00%)	1(20.00%)
G	3(42.86%)			0(0.00%)				3(42.86%)				6(85.71%)	1(14.29%)
種類	①-1	①-2	②	③-1	③-2	③-3	④	⑤	⑥	⑦-1	⑦-2	⑦-3	計
A	5	2	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	9
G	8	2	3	0	0	0	0	0	0	0	0	1	14

表 5 では、講義 A は 80%、講義 G は 85.71%の「話段区分箇所」にメタ言語表現が使用されている。また、①-1、①-2、②のような「進行により強く言及する」メタ言語表現が圧倒的に多く、講義 A で 7 例、G で 13 例となっている。

(3) 講義 A の第 2 次元の「大話段」4 と 5 の「話段区分箇所」(a.両方あり)

【前方】4.(033~198) 書き言葉における「言い換え」の技法

A-197 まあ、【5】④非常に大雑把に言ってしまうと、「すなわち」よりも「つまり」のほうが 2 倍、「要するに」は 3 倍、解釈の入る度合いが高いと。

A-198 まあ、【6】①-2 単純化しすぎかもしれませんが、そのようなことが、言えるだろ

うと思います。

【後方】5. (199～382) 話し言葉における「言い換え」の技法

A-199 (8) で、えっと、さて、【7】①-1 今度は、話し言葉における言い換えというのを考えてみたいと思います。

例(3)は講義Aの「a.両方あり」の例である。前方では、「④述べ方に対する言及」のメタ言語表現【5】と「①-2後付け型構造言及」の【6】で「大話段」の4を切り上げている。後方では、8秒のポーズの後に、接続表現とフィラーの組み合わせ「で、えっと、さて」に続いて、【7】のメタ言語表現によって新しい「大話段」の5を開始している。

(4) 講義Gの第2次元の「大話段」7と8の「話段区分箇所」(c.後方あり)

【前方】7. (466～526) ③聞き手や状況を考慮する(スライド15～17)

G-526 ですから、ま、私が皆さんに「あなた」と呼びかけることは、社会通念上、恐らく可能だと思いますけれども、一方で、皆さんが私に対して「あなた」と、あの一、こ、あれ、呼ぶ、呼ぶのは、相当心理的に抵抗があるだろうと思うわけです。

【後方】8. (527～603) ④時代とともに変わる(スライド18)

G-527 で、えっと、次、【8】②最後のところなんですけれども、{スライド切り替え}【9】①-1 時代とともに変わる人称、ということで、一応、五つの例を挙げてですね↑終わりたいと思います。

例(4)は、講義Gの「c.後方あり」の例である。後方のG-527には、メタ言語表現【8】で項目を列挙するとともに、スライドを切り替え、また、【9】で「五つの例を挙げて終わりたい」と予告して、新しい「大話段」の8を始めている。

4.3 第3次元の「話段区分箇所」におけるメタ言語表現

第3次元の「話段区分箇所」は、講義Aは10カ所、講義Gは36カ所あり、それぞれ、10例と44例のメタ言語表現が使用されている。

表6 第3次元の「話段区分箇所」におけるメタ言語表現

講義	a.両方あり			b.前方あり				c.後方あり			1.メタあり(a+b+c)			2.メタなし
A	1(10.00%)			2(20.00%)				3(30.00%)			6(60.00%)			4(40.00%)
G	5(13.89%)			0(0.00%)				22(61.11%)			27(75.00%)			9(25.00%)
種類	①-1	①-2	②	③-1	③-2	③-3	④	⑤	⑥	⑦-1	⑦-2	⑦-3	計	
A	3	2	0	0	1	0	1	3	0	0	0	0	10	
G	14	1	12	0	1	0	2	9	5	0	0	0	44	

表6では、講義Aは「話段区分箇所」の60.00%、講義Gは75.00%にメタ言語表現が使用されている。メタ言語表現の種類別出現数から見ると、「進行により強く言及する」①～③が数多く、特に、講義Gでは、「①-1前触れ型構造言及」が14例と最も多い。「内容により強く言及する」④～⑦は、それほど多くないが、使用されている。特に、「⑥知識理解への言及」が第3次元から使用され、「⑤自他発話焦点化」が大幅に増える。

(5) 講義 A の第 3 次元の「話段」4.1 と 4.2 の「話段区分箇所」(c.後方あり)

【前方】4.1 (033~083) 日本語の人称表現の四つのポイント

A-083 つまり、言い換えることによって、記憶につなぎ止める役目っていうのも、きっとあるんだろうなーと思います。

【後方】4.2 (084~198) ①人称表現は種類が多い

A-084 まあ、【10】①-2 書き言葉における言い換えというのは、以上のような、まあ、理由で行われるんだろうと思いますが、(4) それぞれ、えっと、「すなわち」と「つまり」と「要するに」、ま、「ていうか」まで入ってますけれども、【11】①-1 「ていうか」は、ま、話し言葉専門なんで、あとで説明することにしますが、【12】①-1 「すなわち」「つまり」「要するに」、この三つの言葉が、あの、どういうニュアンスの違いを持って、どういう役割を果たしているか、ということを少し見たいと思います。

例 (5) は、講義 A の第 3 次元の「話段」4.1 と 4.2 の「話段区分箇所」で、「c.後方あり」の例である。後方で、まず、【10】でこれまでの内容に再び言及し、次に、【11】と【12】によって、後で説明する内容と順番を予告してから、具体的な話題に移っている。

(6) 講義 G の第 3 次元の「話段」5.4 と 5.5 の「話段区分箇所」(c.後方あり)

【前方】5.4 (257~286) 二人称の人称表現 (スライド 6)

G-286 ま、つまり、それだけ人というのは、聞き手、相手に対して話しかける時、気を使って、そのぶんだけ、その、言葉のバリエーションが豊富であるということ、ま、裏付けているのかなあというふうに思います。(2) {スライド切り替え}

【後方】5.5 (287~300) 三人称の人称表現 (スライド 7)

G-287 で、【13】②次ですけれども、【14】①-1 3人称なんですけど、3人称は、実は、その、えっと、代名詞系の 3人称は少ないですね。

例 (6) は、前方の G-286 にはメタ言語表現が使用されず、スライドの切り替えに伴い、後方の G-287 では接続表現の「で」に続き、メタ言語表現の【13】と【14】が使用されている。【13】で「話段」の変化を予告し、【14】で新しい話段の内容を提示している。

4.4 第 4 次元の「話段区分箇所」におけるメタ言語表現

第 4 次元の「話段区分箇所」は、講義 A から 12 カ所、講義 G から 69 カ所抽出され、メタ言語表現の出現数は、それぞれ 14 例と 74 例である。

表 7 によると、講義 A は 91.67%、講義 G は 62.32%の「話段区分箇所」にメタ言語表現が使用されている。特に、「c.後方あり」がともに最も多い。また、講義 G では、「d.両方なし」が第 2 次元で 14.29%、第 3 次元で 25%、第 4 次元で 37.68%まで増えていた。メタ言語表現の種類別の出現数から見ると、講義 A は内容により強く言及する「⑥知識理解への言及」と「⑦言葉の定義」が使用されるようになった。講義 G のメタ言語表現は、第 3 次元の 44 例から、第 4 次元の 74 例に増えている。「進行により強く言及する」①と②が高い数値を示しているが、「内容により強く言及する」ものが増えており、特に、「⑦言葉の定義」が第 4 次元で多くなっている。

表7 第4次元の「話段区分箇所」におけるメタ言語表現

講義	a.両方あり		b.前方あり		c.後方あり		1.メタあり(a+b+c)				2.メタなし		
A	0(0.00%)		1(8.33%)		10(83.33%)		11(91.67%)				1(8.33%)		
G	9(13.04%)		2(2.90%)		32(46.38%)		43(62.32%)				26(37.68%)		
種類	①-1	①-2	②	③-1	③-2	③-3	④	⑤	⑥	⑦-1	⑦-2	⑦-3	計
A	6	1	3	0	0	0	0	0	1	2	1	0	14
G	32	7	24	0	0	0	1	3	0	1	2	4	74

(7) 講義 A の第 4 次元の「話段」5.1.1 と 5.1.2 の「話段区分箇所」(b.前方あり)

【前方】5.1.1 (199~209) 話し言葉の即興的な言い直し

A-208 つまり、まあ、【15】⑦-1 話し言葉における言い換えというのは、言い直しである。

A-209 【16】⑦-1 即興的な言い換えであるというふうに言えます。

【後方】5.1.2 (210~222) 話し言葉の言換えの表現

A-210 で、あの一、書き言葉で一、見られるような、その一、準備された言い換えというのは、少ないです。

例(7)は「b.前方あり」の用例である。前方では、接続表現の「つまり」、フィラーの「まあ」に続いて、【15】と【16】のメタ言語表現で、「⑦-1用語の言い換え説明」を2回行って、結論を述べ、「話段」5.1.1を終了している。後方にはメタ言語表現はないが、接続表現の「で」とフィラーの「あの一」によって、新しい「話段」に移っている。

(8) 講義 G の第 4 次元の「話段」8.6.1 と 8.6.2 の「話段区分箇所」(d.両方なし)

【前方】8.6.1 (587~597) 鈴木孝夫の家族内呼称の法則 (スライド24)

G-597 そして、また、私が、その、えーと、長女を呼ぶ時は、あの一、何でしょう、もちろん、本人の名前を呼ぶこともできますけれども、そう呼ばずに、あの、「お姉ちゃん」という妹から見たな、名称で呼ぶこともできるという、そういう、あのルールがあるということを示しました。{スライド切り替え}

【後方】8.6.2 (598~603) 家族内呼称の変化 (スライド25)

G-598 で、えっと一、ところがなんですけれども、最近ではですね、姉が妹に、妹が姉に呼びかけられる時は、両方とも名前と呼んでいるケースが多いんです。

例(8)は「d.両方なし」の用例である。前方 G-597 には、「そういう、あのルールがあるということを示しました」という結論とスライドの切り替えによって、先行する「話段」の 8.6.1 を切り上げている。後方の G-598 には、「で、えっと一、ところがなんですけれども、」という接続表現とフィラーの組み合わせによって、新しい「話段」に移っている。

4.5 第5次元の「話段区分箇所」におけるメタ言語表現

第5次元の「小話段」の「話段区分箇所」は、講義 A から 7カ所、講義 G から 35カ所抽出され、メタ言語表現の出現数はそれぞれ 7例と 28例である。

表 8 第 5 次元の「話段区分箇所」におけるメタ言語表現

講義	a.両方あり		b.前方あり		c.後方あり			1.メタあり(a+b+c)				2.メタなし	
A	3(42.86%)		0(0.00%)		1(14.29%)			4(57.14%)				3(42.86%)	
G	3(8.57%)		0(0.00%)		17(48.57%)			20(57.14%)				15(42.86%)	
種類	①-1	①-2	②	③-1	③-2	③-3	④	⑤	⑥	⑦-1	⑦-2	⑦-3	計
A	1	1	1	0	1	1	0	2	0	0	0	0	7
G	7	0	2	1	0	0	1	7	1	4	1	4	28

講義 G では、「c.後方あり」が 48.57%と最も高く、これは第 2 次元から第 4 次元の「話段」と共通している。また、第 5 次元の「小話段」では、「2.メタなし」がさらに増え、「1.メタあり」を超えてはいないが、両講義ともに 42.86%になっている。メタ言語表現の数は、両講義ともに減っている。第 5 次元の「小話段」になると、メタ言語表現を使用しない「区分箇所」の割合が高くなり、メタ言語表現の数も少なくなっている。また、講義 G においては、「内容により強く言及する」「⑤自他発話焦点化」、「⑥知識理解への言及」、「⑦言葉の定義」の占める割合が高くなるのも一つの特徴である。

(9) 講義 A の第 5 次元の「小話段」4.1.2.1 と 4.1.2.2 の「話段区分箇所」(a.両方あり)

【前方】4.1.2.1 (038~048) 理解者のための言い換え

A-048 ですから、まず、【17】③-2 ここで押さえてほしいのは、「言い換え」というのは、理解する人のためにしているんだ、ということです。

【後方】4.1.2.2 (049~057) 一つの事柄の二側面を示す言い換え

A-049 で、【18】⑤そのことを、まあ、O さんはこう表現していますが、「言いたいこと、伝えたいことに二つ以上の説明を与えることで、他 [た] の人に、せ、それを、より明確に伝えることができる。」

例 (9) は講義 A の「a.両方あり」の例である。前方の A-048 では、【17】の「③発話機能の明示」、後方 A-049 では、【18】の「⑤自他発話焦点化」によって、要点を押さえた受講生の解答の具体例を挙げている。

(10) 講義 G の第 5 次元の「小話段」8.2.1.3 と 8.2.1.4 の「話段区分箇所」(c.後方あり)

【前方】8.2.1.3 (533~534) 体育会用語としての「自分」：中学の部活から

G-534 つまり、それはなぜかってことがあるわけですけども、比較的体育会系、つまり、上下関係が厳しい世界の中では「自分」というものを使うようなんです。

【後方】8.2.1.4 (535~537) 現場の仕事における「自分」：技術営業

G-535 そしてまた、えっとー、【19】⑦-3 なんでしょ、現場の仕事における「自分」、まあ、たまたま、この前、うちにですね、えっとー、ケーブルテレビを直しに来た人がいたんですけども、その人は、あの、「自分」という言い方をしていました。

例 (10) は「c.後方あり」の用例である。後方の G-535 で、「そしてまた、えっとー、」に続いて、【19】の「なんでしょ」という「⑦-3 表現検索」のメタ言語表現が使用されている。次元が下がるにつれて、使用されるメタ言語表現の種類も変わることが観察される。

5. 考察

以上の分析結果を踏まえ、両講義の全「話段区分箇所」におけるメタ言語表現の出現傾向、メタ言語表現の種類別出現数、スライドの切り替えとの併用、接続表現やフィラーとの共起関係について考察する。

5.1 全「話段区分箇所」におけるメタ言語表現の出現傾向

表9は全「話段区分箇所」におけるメタ言語表現の出現傾向を示すが、以下の(1)～(3)の傾向が明らかになった。

表9 全「話段区分箇所」におけるメタ言語表現の出現傾向

出現 次元		a.両方あり	b.前方あり	c.後方あり	d.両方なし	計
講 義 A	一	0(0.00%)	1(25.00%)	2(50.00%)	1(25.00%)	4(100.00%)
	二	2(40.00%)	1(20.00%)	1(20.00%)	1(20.00%)	5(100.00%)
	三	1(10.00%)	2(20.00%)	3(30.00%)	4(40.00%)	10(100.00%)
	四	0(0.00%)	1(8.33%)	10(83.33%)	1(8.33%)	12(100.00%)
	五	3(42.86%)	0(0.00%)	1(14.29%)	3(42.86%)	7(100.00%)
	計	6(15.79%)	5(13.16%)	17(44.74%)	10(26.32%)	38(100.00%)
		28(73.68%)				
講 義 G	一	1(25.00%)	1(25.00%)	1(25.00%)	1(25.00%)	4(100.00%)
	二	3(42.86%)	0(0.00%)	3(42.86%)	1(14.29%)	7(100.00%)
	三	5(13.89%)	0(0.00%)	22(61.11%)	9(25.00%)	36(100.00%)
	四	9(13.04%)	2(2.90%)	32(46.38%)	26(37.68%)	69(100.00%)
	五	3(8.57%)	0(0.00%)	17(48.57%)	15(42.86%)	35(100.00%)
	計	21(13.91%)	3(1.99%)	75(49.67%)	52(34.44%)	151(100.00%)
		99(65.56%)				

注：()内は、各次元の「話段区分箇所」(右側にある「計」の列)に対する当該種類のパーセンテージを示す。

(1)「1.メタあり」(「a.両方あり」、「b.前方あり」と「c.後方あり」の合計)と「2.メタなし」の割合は、講義Aが73.68%対26.32%、講義Gが65.56%対34.44%となっている。つまり、約6、7割の「話段区分箇所」にメタ言語表現が使用されていることから、メタ言語表現が「話段」を認定する手がかりになると判断される。

(2)「1.メタあり」の3種の中で、「c.後方あり」が最も多く、講義Aが44.74%、講義Gが49.67%となっており、それぞれ、全「話段区分箇所」の約半数を占めている。つまり、先行する「話段」を終えるよりも、後続新しい「話段」を始める際にメタ言語表現が多用され、「話段」開始の指標として、より多く機能するということが分かる。

(3) 講義 G では、「話段」の次元が下がるにつれて「d.両方なし」が増え、第 2 次元の 14.29%から、25.00%、37.68%、42.86%と高くなっている。つまり、「話段」の次元が下がるにつれて、メタ言語表現を使用しない「話段区分箇所」が増えるという傾向がある。

5.2 全「話段区分箇所」におけるメタ言語表現の種類別出現数

表 10 では、両講義の全「話段区分箇所」におけるメタ言語表現の種類別出現数を「話段」の次元別に示すが、以下の (4) ~ (6) の出現傾向が明らかになる。

表 10 全「話段区分箇所」におけるメタ言語表現の種類別出現数

次元 種類	講義 A						講義 G						合計
	一	二	三	四	五	計	一	二	三	四	五	計	
①-1	1	5	3	6	1	16	1	8	14	32	7	62	78
①-2	1	2	2	1	1	7	2	2	1	7	0	12	19
②	0	0	0	3	1	4	1	3	12	24	2	42	46
③-1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1
③-2	0	0	1	0	1	2	0	0	1	0	0	1	3
③-3	1	0	0	0	1	2	1	0	0	0	0	1	3
④	0	1	1	0	0	2	0	0	2	1	1	4	6
⑤	1	1	3	0	2	7	0	0	9	3	7	19	26
⑥	0	0	0	1	0	1	0	0	5	0	1	6	7
⑦-1	0	0	0	2	0	2	0	0	0	1	4	5	7
⑦-2	0	0	0	1	0	1	0	0	0	2	1	3	4
⑦-3	0	0	0	0	0	0	0	1	0	4	4	9	9
合計	4	9	10	14	7	44	5	14	44	74	28	165	209
区分箇所	4	5	10	12	7	38	4	7	36	69	35	151	189
平均出現数	1	1.8	1	1.17	1	1.16	1.25	2	1.22	1.12	0.83	1.12	1.13

(4) 出現数の合計を見ると、「講義の進行により強く言及する」メタ言語表現の 2 種「① 構造言及」と「②項目列举」、特に、「①-1 前触れ型」が「話段」を認定する最も有力な手がかりになる。「①-1 前触れ型」が最も多いということは、(2) の「c.後方あり」が最も多いという結果と一致する。また、「講義の内容により強く言及する」種類ではあるが、「⑤ 自他発話焦点化」も「話段」を認定する際の手がかりになる。

(5) 4.3、4.4、4.5 でも触れたように、使用されるメタ言語表現の種類も「話段」の次元と関係している。全体的に、「話段区分箇所」には、「講義の進行により強く言及する」メタ言語表現の種類が多用されているが、「話段」の次元が下がるにつれて、「講義の内容により強く言及する」メタ言語表現（例えば、「⑤自他発話焦点化」、「⑥知識理解への言及」、「⑦言葉の定義」）が使用されるという傾向がある。

(6) 「話段」の各次元別に使用されるメタ言語表現の数は、両講義ともに第 4 次元まで

は増えるが、第 5 次元では極端に減る。表 10 における「話段区分箇所」の数に示されているように、第 5 次元から「話段区分箇所」が大幅に減ることが一因として考えられる。しかも、1「区分箇所」当たりのメタ言語表現の平均出現数は、第 5 次元でそれぞれ 1 と 0.83 で、両講義ともに他の次元より低くなる。これは、5.1 の (3) の指摘とも一致しており、次元が下がるにつれて、メタ言語表現を使用しない「話段区分箇所」が増え、1「区分箇所」当たりのメタ言語表現の平均出現数も減り、「話段」を認定する指標としての役割が弱まる。(5) で述べた「講義の内容により強く言及する」メタ言語表現が、第 4 次元や第 5 次元のような低次元の「話段区分箇所」に使用されていることもその一因だろう。

5.3 講義 G の「話段区分箇所」におけるスライドの切り替えとメタ言語表現の使用

講義 G では、スライドが使用されており、「話段区分箇所」におけるスライドの切り替えに伴うメタ言語表現の使用傾向が観察された。

表 11 講義 G の「話段区分箇所」におけるスライドの切り替えとメタ言語表現の使用

切替	区分箇所	メタ有無	切替	区分箇所	メタ有無	切替	区分箇所	メタ有無
1	2.3→2.4	後方あり	10	6.2→6.3	両方なし	19	8.2.1→8.2.2	後方あり
2	2→3	両方あり	11	6.5→6.6	両方あり	20	8.2→8.3	後方あり
3	3.2.6→3.2.7	両方あり	12	6.7→6.8	後方あり	21	8.3→8.4	後方あり
4	I→II	両方あり	13	6.8.1→6.8.2	両方あり	22	8.4→8.5	後方あり
5	5.3→5.4	後方あり	14	6→7	後方あり	23	8.5→8.6	後方あり
6	5.4→5.5	後方あり	15	7.1→7.2	後方あり	24	8.6.1→8.6.2	前方あり
7	5.5→5.6	後方あり	16	7.2→7.3	後方あり	25	II→III	後方あり
8	5.6.1→5.6.2	後方あり	17	7→8	後方あり	計	メタあり	メタなし
9	5.6.2→5.6.3	両方あり	18	8.1→8.2	両方あり		24	1

表 11 を見ると、講義 G のスライド (全 26 枚) が切り替えられた 25 回が、すべて「話段区分箇所」で起こり、第 10 回 (6.2→6.3) 以外の 24 回にメタ言語表現が使用されている。中でも、4.2 と 4.3 で挙げた例 (4)、(6) のように、スライドの切り替えと「c.後方あり」のパターンが 16 回あり、最も多い。スライドにも講義の「話段」が反映されているため、スライドの切り替えとメタ言語表現の使用は、「話段」を認定する複数の手がかかりになっている。

5.4 「話段区分箇所」におけるメタ言語表現と接続表現やフィラーの共起関係

「話段区分箇所」には、メタ言語表現以外にも、接続表現やフィラーも使用されており、共起しながら、講義の談話を構造化している。メタ言語表現と接続表現やフィラーの共起関係は、表 12 に示す「共起なし」(メタ言語表現のみあり)、「共起 1」(メタ言語表現とフィラーの共起)、「共起 2」(メタ言語表現と接続表現の共起)、「共起 3」(メタ言語表現と接続表現とフィラーの共起) の 4 種類⁵がある。用例に下線の付した実線はメタ言語表現、

波線はフィラー、は接続表現を示す。また、共起関係の出現位置と種類別の統計を表13に示す。

表12 「話段区分箇所」におけるメタ言語表現、接続表現、フィラーの共起関係

種類	用 例
共起なし	A-405 <u>ちょっと確認してみますが</u> 、(略)。
	G-605 <u>一つ目としては</u> 、人称表現の種類が多いということです。
共起1	A-394 <u>それが</u> 、 <u>まあ</u> 、 <u>あの</u> 、 <u>今日の話の</u> 、 <u>メイン・テーマ</u> でした。
	G-302 <u>まあ</u> 、 <u>用法</u> っていうのは何かというと、(略)。
	G-122 <u>先ほどの話と重なりますけれども</u> 、 <u>えっと</u> 、(略)。
共起2	A-048 で すから、 ま ず、 <u>ここで押さえてほしいのは</u> 、(略)。
	G-233 で 、 <u>順々に</u> 、 <u>2人称</u> 、 <u>3人称</u> と見ていきます。
共起3	A-141 (4) {息を吸う} で 、 そ して、 <u>さらに今度は</u> 、 <u>えーっと</u> 、「 <u>要するに</u> 」ですけれども、(略)。
	G-219 じ ゃ、 <u>えっと</u> 、 <u>今日の話ですけれども</u> 、 <u>今日は</u> 、 <u>えっと</u> 、 <u>四つのことについて</u> 、 <u>えーと</u> 、 <u>皆さんにお話をしたいというふう</u> に考えています。

表13 「話段区分箇所」における共起関係の出現位置と種類別出現傾向

共起関係	講義A			講義G			
	前方	後方	計	前方	後方	計	
共起あり	共起1	5(14.71%)	3(8.82%)	8(23.53%)	9(7.50%)	9(7.50%)	18(15.00%)
	共起2	1(2.94%)	4(11.76%)	5(14.71%)	0(0.00%)	17(14.17%)	17(14.17%)
	共起3	3(8.82%)	14(41.18%)	17(50.00%)	10(8.33%)	68(56.67%)	78(65.00%)
	計	9(26.47%)	21(61.76%)	30(88.24%)	19(15.83%)	94(78.33%)	113(94.17%)
共起なし	1(2.94%)	3(8.82%)	4(11.76%)	4(3.33%)	3(2.50%)	7(5.83%)	
合計	10(29.41%)	24(70.59%)	34(100.00%)	23(19.17%)	97(80.83%)	120(100.00%)	

注：()内は、各講義の「共起あり」と「共起なし」の合計(講義Aでは34、講義Gでは120)に対するパーセンテージを示す。

まず、表13を見ると、「共起なし」(メタ言語表現のみあり)は、講義Aが11.76%、講義Gが5.83%で、最も少ない。それに対して、「共起あり」の3種類(「共起1」・「共起2」・「共起3」)を合わせると、講義Aでは88.24%、講義Gでは94.17%にのぼる。以上のことから、メタ言語表現の大半がフィラーや接続表現と共起するといえる。「共起あり」の3種類のうち、「共起3」(メタ言語表現、接続表現、フィラーの共起)が両講義ともに最も多く、それぞれ、50.00%と65.00%を占める。

次に、「話段区分箇所」の「前方」における共起は、両講義それぞれ26.47%と15.83%であり、「後方」における共起は61.76%と78.33%で、多数を占めている。「話段区分箇所」の後方におけるメタ言語表現は、新しい「話段」を始める機能を有するものである。新し

い「話段」の最初に使用されると、いきなり「話段」が始まり、唐突に聞こえる恐れがある。そのため、「話段区分箇所」におけるメタ言語表現の大半は、接続表現やフィラーと共に共起するのではないかと考えられる。

「共起 1」(フィラーとの共起)は、講義 A では表 12 の A-394 のように、フィラーがメタ言語表現の内部に含まれるものと、G-302、G-122 のように、フィラーがメタ言語表現の外部(前か後)に位置するものが観察される。「共起 2」(接続表現との共起)は、接続表現がメタ言語表現に先行している。「共起 3」(メタ言語表現とフィラーと接続表現の 3 者共起)は、様々な出現位置の組み合わせ⁷が観察される。しかし、表 12 の G-219 「じゃ、ええと、今日の話をすけれども、」のように、「接続表現⇒フィラー⇒メタ言語表現」という順の共起が最も多く、講義 A では、「共起 3」の 17 例のうち 11 例、講義 G では、「共起 3」の 78 例のうち 60 例観察されている。

また、接続表現やフィラーとの共起関係は多くはないが、4.1 で挙げた例 (2)「はい。では、えっと、見たいんですけれども、見て行きたいんですけれども、えっと、(省略)」のように、感動詞の「はい」との共起も、講義 A に 1 例、講義 G に 4 例観察される。

以上のような共起関係を把握することにより、「話段」を認定する上での複合的な手がかりが得られるのではないかと思う。

6. 結論と今後の課題

本研究は、西條研究代表者(2007)、佐久間編著(2010)、佐久間研究代表者(2014・2015)による講義理解の共同研究の一環としてのメタ言語表現に関する分析である。2 種の講義 A、G の「話段区分箇所」におけるメタ言語表現の出現傾向を分析した結果、以下の 3 点の結論が得られた。

1、「非話段区分箇所」よりも、「話段区分箇所」におけるメタ言語表現の出現率(文数に対する)の方が圧倒的に高いこと、および、約 6、7 割の「話段区分箇所」にメタ言語表現が使用されることの 2 点から、メタ言語表現が「話段」を認定する際の手がかりになるという仮説の妥当性が検証された。

2、「話段区分箇所」に使用されるメタ言語表現の特徴として、a.後続新しい「話段」を始める際に多く機能すること、b.「①構造言及」(特に、「①-1 前触れ型」)、「②項目列举」、「⑤自他発話焦点化」のような種類のメタ言語表現が「話段」を認定する上で、より有力な手がかりになること、c.高次元の「大話段」と「話段」を形成する際に、メタ言語表現がより多く使用されることが明らかになった。

3、「話段区分箇所」におけるスライドの切り替えとメタ言語表現の使用、接続表現やフィラーとメタ言語表現の共起関係は、「話段」を認定する上での複合的な手がかりとなる可能性が示唆された。

メタ言語表現(特に、「講義の進行により強く言及する」種類)は、接続表現やフィラーと共に共起して、「話段区分箇所」(特に、新しい「話段」の始め)に使用されることで、受講者に「話段」(特に、高次元の「話段」)の展開、「大話段」の始めを分かりやすく示す働きをしている。「話段」を反映させたスライドを用いる講義 G では、スライドの切り替えに

伴うメタ言語表現の使用がより効果的である。以上の結論から、日本語教育への提案として、講義者と受講者（特に、学部留学生）のための講義理解の方法が考えられる。

まず、講義者は、a.メタ言語表現、特に「①構造言及」、「②項目列举」、「⑤自他発話焦点化」のような種類のメタ言語表現の使用により、講義の「話段」の多重構造を受講者にも分かりやすく展開するように心がける。b.新しい「話段」を始める際に、メタ言語表現によって「始め」を示し、内容や話題を予告する。c.「話段」の次元に応じて、メタ言語表現の使用数や種類を調整し、大小の「話段」や内容の軽重を明示する。d.スライドの作成に「話段」の多重構造を反映させ、講義中にスライドを切り替える際は、口頭でもメタ言語表現で明示して、構造の分かりやすい講義にする。e.接続表現やフィラー等とメタ言語表現を共起させて、受講者に「話段」の展開を意識化させるようにする。

一方、受講者は、a.メタ言語表現を手がかりに、講義の「話段」の多重構造を把握し、新しい「話段」の始まりを意識して、内容や話題を予測する。b.講義の「話段」を認定するより有力な手がかりとなるメタ言語表現の種類を学び、講義の展開をメタ的に捉える。c.メタ言語表現の種類や出現数によって、「話段」の次元や内容の軽重を区別する。d.接続表現、フィラーとメタ言語表現の共起を捉えて、「話段」の展開に応じた聴く姿勢を整えるようにする。e.スライドの切り替えとメタ言語表現によって、「話段」の展開を理解する。

以上のような講義理解ができるように、講義理解を支援する科目の開設など、日本語教育における適切な指導や支援が必要になる。本研究で分析の材料として用いた講義 A、G は、講義理解のための教材としても様々な活用ができる。例えば、(1) 学習者に講義のビデオを視聴させ、メタ言語表現が出てきたところで止めて、後の展開や内容を予測させ、予測する理由について話し合わせる。(2) 講義の一部を選んで、もともとあったメタ言語表現を全部取り消した「メタなし」の講義のスクリプトを作成し、「メタあり」の元の講義のスクリプトと比べさせる。(3) 「話段」の多重構造を可視化できる「談話構造図」(【添付資料】図 1、図 2) を用いて、「話段」の概念を導入し、実際に「話段」区分をさせ、何を手がかりにして「話段」を捉えたのかについて話し合わせる。(4) 講義のビデオを見ながら受講ノートを取り、何を聞いてノートに書き留めたのかについて話し合う。メタ言語表現の意識化を図るためには、以上の (1) ~ (4) の指導方法が考えられる。

本研究では、講義 A、G の「話段区分箇所」を中心に考察したが、「非話段区分箇所」のメタ言語表現についても分析する必要がある。また、他の分野や談話構造の異なる講義についても、メタ言語表現の出現傾向を把握する必要がある。さらに、メタ言語表現が実際の講義理解にどのように役立つのかを明らかにするには、佐久間研究代表者(2014・2015)の先行研究においてすでに調査済みの、受講者による理解データ(①受講ノート、②受講後の要約文、③インタビュー)の調査結果によって、検証する必要がある。さらに、以上の研究成果を踏まえた教材開発、及び、教育現場での教育実践も今後の課題である。

謝辞

本研究で分析資料とした講義 A と G、及び「話段区分」のデータの使用をご快諾いただいた科学研究費補助金基盤研究 (B) (一般) [23320110]の研究代表者である本学大学院日

本語教育研究科の佐久間まゆみ教授をはじめ、講義提供者の先生や一連の講義理解の共同研究に携わる「文章・談話研究会」の皆様方の学恩に対して、心より感謝申し上げます。また、貴重なご助言をいただいた査読者の先生方に深く御礼申し上げます。

注

- 1 「情報伝達単位 (CU)」とは、「文章・談話における情報伝達の基本となる機能的単位である。佐久間編 (1989・1994)、佐久間 (1997、2000) 等による要約文の『原文残存認定単位』(ZT) (10類 24種) に基づき、講義の談話の表現と受講者の理解の諸相を示す受講者のノートと要約文の文章表現との対応関係を分析するために再設定された『情報伝達単位 (CU)』(16類 35種) (佐久間 2010:16) である。この分類には、メタ言語表現が直接入っていないが、メタ言語表現的な役割を担う複数の単位が含まれている。
- 2 佐久間研究代表者 (2014) には、人文学系講義を 14 資料収集されているが、本研究では、研究代表者と講義提供者の許可を得た上で、2 資料 (講義 A と G) のみを使用する。いずれも同一講義者による 30 代と 40 代の内容の異なる講義である。
- 3 本稿の巻末にある【添付資料】の「談話構造図」は、佐久間研究代表者 (2014:13-14) の『大学学部留学生のための講義の談話に関する研究』報告書より許可を得て転載したものである。「話段」の 4 次元までが図式化されているが、「話段」の多重構造を可視化する上で有効なものである。
- 4 一律に前後の「話段」の隣接する 2 文のみから捉えるのではなく、講義の談話全体の文脈から判断するのが妥当だと考えられる。例えば、4.1 の例 (2) のように、第 1 次元の「大話段」の「区分箇所」において、「はい。」の 1 文で「後方」を始める場合、その後の文も「話段区分箇所」に含める必要がある。また、4.2 の例 (3) や 4.4 の例 (7) のように、意味上切り離せない場合も、前後の文を「区分箇所」の範囲内に含める。
- 5 メタ言語表現の使用されていない「話段区分箇所」において、フィラーと接続表現の共起も観察されるが、メタ言語表現との共起ではないため、本研究の分析対象外とする。
- 6 「メタあり」の「話段区分箇所」をさらに「前方」と「後方」に分けて共起関係について考察したため、100%となる合計は、「両方あり」×2+「前方あり」+「後方あり」で算出した数値である。講義 A は $6 \times 2 + 5 + 17 = 34$ であり、講義 G は $21 \times 2 + 3 + 75 = 120$ である。
- 7 例えば、「メタ言語表現→接続表現→フィラー」「接続表現→フィラーメタ言語表現→接続表現」「接続表現→フィラー→接続表現→メタ言語表現」「接続表現→フィラー→接続表現→フィラー→メタ言語表現→フィラー→メタ言語表現」などと、実に多様である。

参考文献

- 石黒圭・佐久間まゆみ・渡辺文生・宮田公治・宮澤太聡 (2013) 「ワークショップ講義の談話の単位と展開」『日本語学会 2013 年度秋季大会予稿集』、pp.27-44
- 市川孝 (1978) 『国語教育のための文章論概説』教育出版
- 西條美紀 (1996) 「ディベートにおけるメタ言語」『日本語学』15、明治書院、pp.68-75
- (1999) 『談話におけるメタ言語の役割』風間書房
- (2000) 「談話構造図作成法によるノートテーキング」『講座日本語教育』36、早稲田大学日本語教育研究センター、pp.53-68
- (2001) 「談話構造図作成法によるノートテーキングの訓練効果について」『早稲田大学日本語教育センター紀要』14、pp.123-136
- 西條美紀研究代表者 (2007) 『学際的アプローチによる大学生の講義理解能力育成のためのカリキュラム開発』平成 16 年度～18 年度科学研究費補助金基盤研究 (C) 16520319
- 佐久間まゆみ (1987) 「文段認定の一基準 (I) — 提題表現の統括 —」『文藝言語研究言語篇』11、筑

- 波大学文芸・言語学系、pp.89-135
- 研究代表者（1997）『要約文の表現類型と評価方法—外国人学習者と日本人大学生の比較—』、平成6～8年度科学研究費補助金研究成果報告書基盤研究（C）（2）06808027
- （1999）「現代日本語の文章構造類型」『日本女子大学紀要 文学部』48、pp.1-28
- （2006）「文章・談話の分析単位」『月刊言語』35-10、大修館書店、pp.65-73
- （2007）「第1章講義の談話の話段と談話型」西條美紀（研究代表者）『学際的アプローチによる大学生の講義理解能力育成のためのカリキュラム開発研究成果報告書』、平成16～18年度科学研究費補助金（C）、pp.1-12
- 佐久間まゆみ研究代表者（2014）『大学学部留学生のための講義の談話に関する研究』2011～2013年度科学研究費補助金基盤研究（B）（一般）23320110
- （2015）『大学学部留学生による講義理解の表現類型に関する研究』2014年度早稲田大学特定課題研究助成費 A（一般）2014A-059
- 佐久間まゆみ編著（1989）『文章構造と要約文の諸相』くろしお出版
- （1994）『要約文の表現類型—国語教育と日本語教育のために—』ひつじ書房
- （2010）『講義の談話の表現と理解』くろしお出版
- 澤邊裕子（2001）「講義に用いられるメタ言語表現の一研究—日本語学習者と日本語母語話者の講義聴解との関係」『小出記念日本語教育研究会論文集』9、小出記念日本語教育研究会、pp.7-23
- 杉戸清樹・塚田実知代（1991）「言語行動を説明する言語表現—専門的文章の場合—」『国立国語研究所報告103、研究報告集12』国立国語研究所、pp.131-164
- （1993）「言語行動を説明する言語表現—公的なあいさつの場合—」『国立国語研究所報告105、研究報告集14』国立国語研究所、pp.31-79
- 杉戸清樹（1996）「メタ言語行動の視野—言語行動の「構え」を探る視点」『日本語学』15（11）、明治書院、pp.19-27
- 杉戸清樹・尾崎喜光（2006）「第1章「敬意表現」から「言語行動における配慮」へ」『言語行動における配慮の諸相』くろしお出版、pp.1-10
- 関口律子（2005）「留学生の講義理解におけるメタ言語の役割」『拓殖大学日本語紀要』15、pp.39-60
- （2006）「学部留学生のためのアジャнкт・クラスの試み—枠組みとコース設計を中心に」『拓殖大学日本語紀要』16、pp.13-30
- 時枝誠記（1960）『文章研究序説』山田書院
- 中井陽子・寅丸真澄（2007）「「講義の談話のメタ言語表現」西條美紀（研究代表者）『学際的アプローチによる大学生の講義理解能力育成のためのカリキュラム開発研究成果報告書』、平成16～18年度科学研究費補助金（C）、pp.74-83
- （2010）「第8章講義の談話のメタ言語表現」佐久間まゆみ（編著）『講義の談話の表現と理解』くろしお出版、pp.153-168
- 古別府ひづる（1993）「専門的内容における口頭発表のメタ言語表現」『表現研究』59、pp.12-22
- （1994）「研究報告における口頭発表のメタ言語表現—日本人と留学生との比較—」『平成6年度日本語教育学会春季大会予稿集』日本語教育学会、pp.103-108
- 李婷（2014）「講義の談話におけるメタ言語表現の働き—『話段』の区分箇所に着目して」佐久間まゆみ研究代表者、石黒圭編『「大学学部留学生のための講義の談話に関する研究」論文集』2011～2013年度科学研究費補助金基盤研究（B）23320110、pp.44-59

（り てい 早稲田大学大学院日本語教育研究科・博士後期課程）

【添付資料】

図1 講義Aの談話構造図

0:00	I. 開始部 講義の開始と課題の提示 1~32 (32)
	1. 調査目的の説明[講義者A] 1~7 (7)
	+
	2. 調査内容の説明と指示[調査者T] 8~16 (9)
4:11	3. 講義の課題「言い換え」の提示[講義者A] 17~32 (16)
	3.1 「リダンダンシア」と「言い換え」 17~25 (9)
	3.2 「言い換え」の技法の定義 26~32 (7)
7:11	II. 展開部 講義内容の説明 33~382 (350)
	4. 書き言葉における「言い換え」の技法 33~198 (166)
	4.1 書き言葉における「言い換え」の特徴 33~83 (51)
	4.2 「すなわち」「つまり」「要するに」の用法の説明 84~198 (115)
	4.2.1 「すなわち」「つまり」「要するに」の違い 84 (1)
	4.2.2 プリント[表]の見方 85~97 (13)
	4.2.3 「すなわち」の役割 98~121 (24)
	4.2.4 「つまり」の役割 122~140 (19)
	4.2.5 「要するに」の役割 141~159 (19)
	4.2.6 「すなわち」「つまり」「要するに」の比較 160~198 (39)
33:30	5. 話し言葉における「言い換え」の技法 199~382 (184)
	5.1 話し言葉の「言い換え」の特徴 199~222 (24)
	5.2 「ていつか」の用法の説明 223~382 (160)
	5.2.1 「ていつか」の不快感の有無 223~240 (18)
	5.2.2 「ていつか」が不愉快な理由 241~330 (90)
	5.2.3 「ていつか」が不愉快な理由 331~353 (23)
	5.2.4 「ていつか」が不愉快な理由 354~374 (21)
	5.2.5 「ていつか」の不愉快さの理由 375~382 (8)
54:31	III. 終了部 講義の終了と調査の指示 383~418 (36)
	6. 今日の講義内容のまとめ 383~397 (15)
	6.1 「言い換え」のまとめ 383~389 (7)
	6.2 書き言葉と話し言葉における「言い換え」の違い 390~394 (5)
	6.3 「ていつか」の不愉快さの理由と注意 395~397 (3)
	+
	7. 今後の講義の予告 398~405 (8)
58:36	8. 調査の指示[調査者T] 406~418 (13)
61:42	

* () 内の数字は各話段の文数を示す。

* 図の左側の数字は講義A、Gの時間経過を示す。

* 文・段の接続関係 (市川孝 1978)
(縦書きの場合の記号)

- | | |
|----------|----------|
| 1. 順接型 ↓ | 2. 逆接型 Z |
| 3. 添加型 + | 4. 対比型 ↓ |
| 5. 同列型 | 6. 転換型 ← |
| 7. 補足型 ↑ | 8. 連鎖型 |

* 佐久間まゆみ研究代表者 (2014 : 13-14) の研究成果報告書の【図1-1】と【図1-2】を、本稿の【添付資料】図1と図2として転載した。

図2 講義Gの談話構造図

0:00	I. 開始部 講義の開始と課題の提示 1~230 (230)
	1. 調査内容の説明と指示 1~65 (65)
8:54	2. 講義の導入 66~147 (82) (スライド1)
	2.1 講師の自己紹介 66~72 (7)
	2.2 講義内容の予告 73~75 (3)
	2.3 講義の進め方の説明 76~78 (3)
	2.4 社会言語学 79~147 (69) (スライド2)
	2.4.1 社会言語学とは何か 79~89 (11)
	2.4.2 言葉には種類がある 90~117 (28)
	2.4.3 言葉は選択である 118~125 (8)
	2.4.4 言葉は変化する 126~147 (22)
21:56	3. 講義の課題「人称表現」の提示 148~230 (83)
	3.1 人称表現の定義 148~152 (5) (スライド3)
	3.2 日本語の人称表現の特徴 153~218 (66) (スライド4)
	3.3 今日のテーマ 219~230 (12)
	3.3.1 人称表現の四つのポイント 219 (1)
	3.3.2 ①人称表現は種類が多い 220~223 (4)
	3.3.3 ②話し手のアイデンティティに根ざす 224~225(2)
	3.3.4 ③聞き手や状況を考慮する 226 (1)
	3.3.5 ④時代とともに変わる 227 (1)
	3.3.6 四つのポイントと種類・選択・変化の関係 228~230 (3)
33:22	II. 展開部 講義内容の説明 231~603 (373)
	4. ①人称表現は種類が多い 231~371 (141)
	4.1 説明の手順の予告 231~233 (3) (スライド5)
	4.2 5種類ある日本語の人称表現 234~235 (2)
	4.3 一人称の人称表現 236~256 (21)
	4.4 二人称の人称表現 257~286 (30) (スライド6)
	4.5 三人称の人称表現 287~300 (14) (スライド7)
	4.6 人称表現の用法 301~371 (71)
	4.6.1 人称表現の用法の多様性 301~329 (29) (スライド8)
	4.6.2 素材的用法としての三人称 330~356 (27) (スライド9)
	4.6.3 人称表現の種類はじつは少ない 357~371 (15) (スライド10)
57:59	5. ②話し手のアイデンティティに根ざす 372~465 (94)
	5.1 一人称の変遷を語る(日本人) 372~379 (8) (スライド11)
	5.2 一人称の変遷をまとめる 380~383 (4)
	5.3 一人称とアイデンティティ 384~385 (2)
	5.4 性別による一人称 386~390 (5)
	5.5 年代による一人称の変化 391~416 (26)
	5.6 年代による親族呼称の変化 417~441 (25) (スライド12)
	5.7 一人称・親族呼称の変化のまとめ 442 (1)
	5.8 話し手のキャラ立て 443~465 (23)
	5.8.1 キャラとアイデンティティ 443~457 (15) (スライド13)
	5.8.2 怒たま乱木脚のキャラ立て 458~465 (8) (スライド14)
72:57	6. ③聞き手や状況を考慮する 466~526 (61)
	6.1 聞き手や状況の多様性 466~484 (19) (スライド15)
	6.2 ゼロ代名詞 485~504 (20) (スライド16)
	6.3 二人称表現は失礼か 505~526 (22) (スライド17)
83:01	7. ④時代とともに変わる 527~603 (77)
	7.1 時代とともに変わる予告 527~528 (2) (スライド18)
	7.2 「自分」の謎 529~558 (30)
	7.2.1 「自分」の社会言語学的性格 529~547 (19) (スライド19)
	7.2.2 「自分」のテクニカル性格 548~558 (11) (スライド20)
	7.3 「うち」の謎 559~570 (12) (スライド21)
	7.4 「こっち」の謎 571~580 (10) (スライド22)
	7.5 消えゆく「父」と「母」 581~586 (6) (スライド23)
	7.6 家族内呼称の体系と変化 587~603 (17)
	7.6.1 鈴木孝夫の家族内呼称の法則 587~597 (11) (スライド24)
	7.6.2 家族内呼称の変化 598~603 (6) (スライド25)
94:41	III. 終了部 講義の終了 604~616 (13)
	8. 今日の講義内容のまとめ 604~616 (13) (スライド26)
	8.1 人称表現の四つのポイント 604 (1)
	8.2 ①人称表現は種類が多い 605~606 (2)
	8.3 ②話し手のアイデンティティに根ざす 607~608 (2)
	8.4 ③聞き手や状況を考慮する 609~611 (3)
	8.5 ④時代とともに変わる 612~613 (2)
97:00	9. 終わりの言葉 614~616(3)